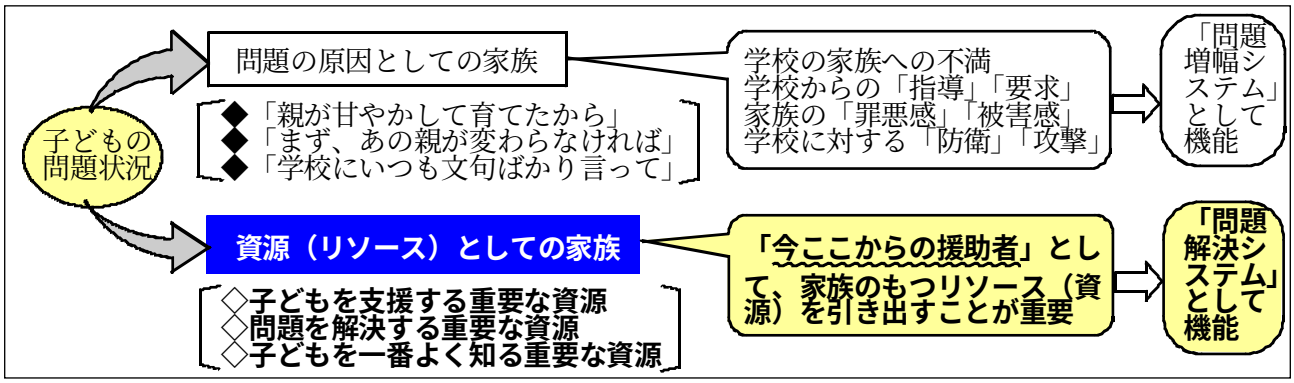
保護者への寄り添い方(1)

保護者と教師の連携・協働は、子育て・教育の専門家同士として「**同じものの見方をして、異なる仕事（役割）を遂行すること**」と考えることができます。学校教育の専門家である教師には、保護者との対話の「文脈」を規定している自分たちの「見方」や「前提」を、もう一度チェックしてみることが必要と言えましょう。

▲▽　▲▽

Ⅰ　「問題」としての家族→「資源（リソース）」としての家族という文脈に変える

保護者と教師がうまく連携できない原因の一つに、お互いに相手を批判的に見てしまい、感情的なしこりが残るようなコミュニケーションパターンになっていることがある。そうしたとき、教師は、家族を「問題」という文脈で見ていることが多い。家族を「資源」という文脈で捉えなおしたとき、そこに新たなかかわり方が生まれる。



Ⅱ　家族を「資源」の文脈とする視点

□　何かそうせざるを得ない事情があると考える

常識的家族観にとらわれすぎない

「こうするのが親として当たりまえだろう」ではなく、「**何か事情があるのだろうか**」「**学校でサポートできることはないか**」という姿勢をもつ。

□　家族の「思い（しんどさ・悲しさ）」を感じる

問題のある保護者を「指導」しない

・教師から、家庭生活に関することを直接「指導」されると「批判」されているような気分になり、拒否的・防衛的になる。

例：「朝はきちんと起こして下さい」→「朝起こすこともできないのか」と言われているよう

・保護者は、**子どもを「愛している気持ち」「大切に思う気持ち」自体を否定された**と受け止めたとき、たとえ自分のやり方が不適切だと思っても、教師を拒絶する。

・「指導」ではなく、**「家族の思い」を感じる**ようにすると、親は安心感から「ゆとり」が生まれ、「もう少し頑張ってみるかという気になってくる。

□　保護者は、子どものことを一番よく知っている

学校で見られるのは、その子の一面

・教師は、**家族から教えてもらう**というスタンスで、子どもの姿、家族の思いを聴いくと、子どもの全体像がわかる。

・**「うちの子はそんなことをする子ではない**」という親のとらえ方も、子どもの一側面である。

・**「学校ではわからなかったお子さんの一面を教えていただいて助かりました」⇒「庭ではわからなかった子どもの一面を教えていただいて助かりました**」と感じる。

□　家族の子育てに「できる範囲で」教師が協力していく

学校の指導の「下請け」を求めない

・家族の子育てに対して、**教師がお手伝いするという姿勢での連携**は、学校に助けてもらっていると思い、「快」に感じる。

・保護者は、**自分が学校の要求に応えていない**と思うと、罪悪感や申し訳なさを感じ、教師と距離を置き、防衛的になる。

・「何とか学校によこしてください」という要求は、**親でありながら有効な手を打てないことを責められている**と受け取る。

▲▽　▲▽

【参考文献】　石隈利紀『学校心理学』，誠信書房，　1999
石隈利紀他編『学校心理士－理論と実践２』，北大路書房，　2004